

□ **日本最北端の大学**

稚内と言えば、地名だけは結構多くの人に知られているのではないかと思われませんが、日本最北端に位置し、人口は約四万強の小さな街です。ここに、稚内北星短期大学は、八年前に設立されました。もともと道北地方は高等教育機関の空白地帯であり、もともと隣接した市立名寄短期大学までも二百kmもあります。こうした状況下で、本地域の大学・短大進学率は極めて低く、他の大学へ進学しようとする子弟を持つ父兄の経済的負担などを解消するために、約二十年前に稚内に高等教育機関を誘致する運動が始まりました。この呼び掛けに対して、北星学園の援助のもと、稚内市、市民からの浄財で、この地に経営情報学科と英文科の二学科構成で稚内北星学園短期大学が設立されました。定員は、経営情報学科が

百名、英文学科は八十名ですが、一九九一年に英文学科に英文情報コースが設けられました。また、一九九二年には、情報系を中心により高度の教育をおこなうために、経営情報学科に専攻科が更に設けられています。

最北端と聞くと、さぞや冬は厳しかろうと思われがちですが、気温は案外低くありません。一方、夏は快適そのものです。日中でも戸外で三十度を越えることはなく、二十七度もあると、「今日は暑いな」という会話が交わされるほどです。大阪と学生時代過ごした京都の町の蒸風呂のような暑さを知っているものには、別天地のような快適さです。

□ **最北端は最先端**

地元の多くの期待を担い開学したものの、最初の年から定員割れをおこし、存廃の危機に直面することになりました。

最初に赴任した教職員の話を聞くと、当時は高校生一人一人を訪問して学生を集めるという非常な努力をされたそうです。そうした努力の一方、経営情報学科を中心に最先端の情報教育をおこなう事を大学の特徴にしたのでした。当時、ほとんどの大学で情報教育といえば大型計算機が中心でありましたが、これからの情報の中心はワークステーションである事、そのワークステーションのオペレーティングシステムとしてはUNIXがもっとも有望であるという、今から考えれば非常な先見の明をもって教育にあたった訳です。そして、おからの情報ブームと共に、本学の入学者も徐々に増大し、一九九一年には、定員を上回る学生を迎える事ができるようになりました。

本学の最大の特徴ともいえる情報教育を端的にあらわした言葉が「最北端は最先端」というスローガンである訳ですが、いわゆる大学ランキングでは最底辺校であり、入学してくる学生は少なからず学

習上の困難を抱えています。従って、単に先端の教育をすればそれで良い訳でなく、きめ細やかな教育が必要とされました。これは英文学科にあつては、少人数教育、ネイティブスピーカーによる会話などの教育実践を中心にし、経営情報学科にあつては実習中心の教育に端的に表れています。特に、経営情報学科では二学年あわせて定員二百人に対して、実習機械が百二十台という施設を有し、実習時間外での学生の自習を施設的に保証するものとなつています。つまり、情報系では、空き時間は一日中マシンを操作できる訳で、これは全国的にも非常に珍しい贅沢な環境にあります。この環境ときめ細やかな教育によつて、コンピュータフリークとも言えるような学生が多く育つ基盤となつています。一方、このような特化した教育は、本学に入学して来る学生が少なからず持つている劣等感を払拭する役割も持つています。実際、都会の大学のように周辺に娯楽施設も少なく、

ある意味では勉強しかありません。と言つて、情報の場合、どの学生もゼロからの出発ですから、努力次第では急速に成長することが可能であり、また学生を引き付けるそれだけの魅力もある訳です。現実には、一昨年までは情報ブームの中で非常に多くの学生が卒業後プログラマーの道を選び、就職をする中で、情報の世界ではかなり有名な大学になっていきます。とは言え、情報を中心に考えるならば、現在の経営情報学科の授業はかなり過密なものとなつており、学生の負担の点でも、教育効果という点でも問題を抱えています。そのために、本学では将来展望として、情報系の四年制大学に移行することが教授会で合意されていますが、現実的には後述するようになかなか困難な状況にあります。

□ 不況と若者の人口減の中で

バブル崩壊と同時に始まった不況と若者人口の減少は、辺境の地にある本学を

直撃しました。とりわけ英文学科は昨年から定員割れを起こし、経営情報学科では定員を確保はしているものの志願者は着実に減少しています。これを大学の特徴という点で捉えるならば、英文学科は、英語情報コースという全国でも珍しいコースを持つことが一つの特徴となつていますが、実際は、英語も情報もという志望を持つ学生は少なくなつてきており、経営情報学科に流出しているのが現状です。また、英文学科英文コースは、少人数教育などに他学と比較しても大きな重点が置かれていますが、地域的限界を越えてなお志願者に十分な魅力があるとは言いがたい状況です。これに対して、経営情報学科では、全国的にも魅力ある情報教育を打ち出してきたことで、まだかろうじて魅力を有しているという所でしょうが、決して樂觀を許すような状況でもありません。実際、数年前まではほとんどの学生が情報系産業に就職するという状況から一転して情報系への就職は激減

しています。

こうした中で新しい大学の魅力を打ち出すべく、来年度より、最近マスコミでも取り上げられる事の多いインターネット（国際的コンピュータネットワーク）、マルチメディアを新しい柱にすべく、教育内容、施設の更新を計画しています。

この辺は、規模が小さい事により機敏な対応が取れる事が幸いするのではないかと期待が持てる所ではあります。そして、この打ち出しと共に、これまでの本学の方向として、経営情報学科は情報を柱とするが、英文学科ではそれを比する柱を持ち得ていなかった点を改善し（英語情報コースはあったが、本学全体の柱として情報を基礎に据える事が合意されました。これに従って、来年度より情報系基礎科目は教養科目として全学生に教育して行く事になっています。勿論、情報系専門科目との関連や情報基礎科目における理念、教育内容についてもまだまだ議論・実践していかなければならない点が

多々ありますが、一応今後の方向性については定まったように思われます。

□ 大学と地域

本学は、多くの短大におけると同様に十八歳人口の減少に直面すると共に、地方大学故の困難さに人一倍直面しています。しかし、同時にそうであるが故に、これまでも特徴を持たずには維持できてこれなかつた訳で、今後もそうした方向でしか打開できないであろうと思われま

すが、一方、地域に貢献するという点では大きな弱点を有しています。稚内は、観光と、一次産業が主であり、近年急増するロシアとの交易がそれに加わる程度の町で、これにどのように貢献するのかわからない点では疑問を持たざるを得ないのでが実情です。実際、本学でおこなっている情報教育は最先端であるが故に、なかなか地元で還元できないという実情があります。また、ロシアとの交易の急増に

伴い、市中ではロシア人の姿をみかける事も多く、ロシア語やロシア文化に関心が高まりつつあり、従来以上にこうした局面に大学教育として対応すべきであるという声も大きくなりつつあります。勿論、他の面で見るとすれば、例えば、本学では英文学科では英語教員免許、経営情報学科では数学教員免許（道内短大で数学を取得できるのは本学のみと思われる）を取得でき、現実にも毎年教員になる学生は増加しつつある等の貢献をしています。とはいえ、地域に根ざした大学とはまだ言えない状況であるし、かと言って、如何なる意味での貢献ができるのかという点でもまだまだ未解明な部分が多いのが現状です。従来からある公開講座だけで良いのか、それとも更に地域に應えるべきなのか、どこまで應えるべきなのか、どこまで可能なのであるのか、等々本学では今日も議論が続けられています。

（かなやま・のりよ）